

孫の江美がパジャマ姿のまま、庭に現れた。こわばった面持ちで、私に朝刊を突き出している。その新聞紙の先端が、小刻みに震えていた。

私は、日課の木刀の素振り三百回を終えたところだった。江美の発した声が、疲弊した私の鼓膜をかすかに振動させる。ただならぬ気配だけは感じられた。

私は、補聴器のスイッチを入れた。

足腰が丈夫なのはありがたい。が、その他のあちこちは錆び付き、経年劣化が激しい。良くて現状維持、あとはただ衰えゆき、朽ちてゆくだけのこの体――避けられない現実。あまり苦にしていなくてもりだった。が、とみに最近、己の弱体化を強く実感するようになった。素振り百五十回を超えたあたりで、すでに腕が重くなる。息が上がる。ついこのあいだまでは、そんなことはなかったはずのだが……その記憶すら、怪しい。

そろそろ年貢の納め時、ということか。

今あらためて振り返らずとも、私が決して褒められた人生を送って来なかったことは痛いほど実感している。妻のきみ江は、三十年近くも苦労ばかり背負い込み、一度も私に繰り言を告げずに逝った。

「ねえおじいちゃん、この人……『どうもおばさん』じゃない？ そうでしょ？」

江美の声に我に返る。私は、テーブルの上の老眼鏡をかけ、新聞記事を読んだ。

「児童公園に変死体」という、ごく小さな記事だった。

昨夜の十一時過ぎ、帰宅途中のサラリーマンが児童公園に女性が倒れているのを発見。119番通報をしたが、すでに死亡していた。背中を鋭利な刃物で数ヶ所刺されたことによる失血死。被害者は××市に住む伊崎菜穂子、四十一歳。知的障害があり、市内××街の自立支援施設に通っていた。警察は、殺人事件と見て捜査を開始――

そんな内容だった。

「怖いわねえ。菊井さんたちがゲートボールやってる公園でしょう？ 江美、あなたも最近遅いから、お母さん、迎えに行こうか？」

「いいよ、子どもじゃあるまいし」

「子どもでしょ！」

嫁——長男、宏樹ひろぎの妻の有里子ゆりこと江美が言い合う。まるで姉妹のような母と娘の姿。毎朝の光景だ。

私は、妻を亡くしてしばらく一人で暮らしていた。が、そろそろ八十の声を聞く頃、宏樹から同居しないか、との申し出があった。厄介者の年寄りが増えるだけだ。私は固辞した。が、宏樹よりもむしろ、有里子が「どうしても」とあまりに強く言うので、住んでいた市営住宅を引き払い、この家で同居を始めた。

もともと、この家も土地も、私のものだった。が、妻の死を機に、生前贈与という形で、預貯金の大半をはじめ、すべてを宏樹に贈っている。我が子可愛さ、という気持ちがないといったら嘘になる。が、土地も建物もお金も、もはや私には必要のないものだ。

一人息子の宏樹は、口には出さないが、私へ引け目を感じているのかもしれない。その点を宏樹に直接尋ねたことはない。

その宏樹は現在、シンガポールへ単身赴任中だ。三年の期限の最後の年だったはずだが、支社で業績を上げたのか、あと一年延期して欲しい、と本社から命じられたらしい。

江美は、現在大学二年生。専攻は「進化生物学」とやらだそうだが、「福祉」に関するサークルに入っていた。

実は、江美の上には、兄がいた。宏樹と有里子にとってはじめての子であり、私にとつても初孫だった。宏樹は、ダウン症だった。そして彼が十二歳の時、公園からボールを追いかけて道路に飛び出し、タクシーに撥ねられて亡くなった。四歳違いの妹である江美が「障碍者福祉しょうがいしゃ」に興味を抱くようになった一因には、兄の存在があったのかもしれない。

『どうして』『どうもおばさん』だ、と思うんだね?」

私は江美に尋ねた。

『だって、へむすびの家』で『いごきなほい』って名札付けてたし……』

江美は納豆をかき混ぜながら答えた。

「着替えてから食べなさい、って言ってるでしょう！」

有里子の叱責。ものともしない江美の食欲。毎朝の日常——平和な家族の姿。人の死を語るにふさわしい場とは言えない。

〈むすびの家〉とは、江美がサークル活動で、ヴォランティアとしてサポートを行なっている民間の障害者自立支援施設だ。つい最近までは「授産所」と呼ばれていた。

二十名あまりの知的障害者の就労支援を行なっている。私も何度か、〈むすびの家〉主催のバザーに顔を出したことがあった。

「どうもおばさん」に会ったのは、市の主催で開催された「ふくしまつり」だった。もう二年近く前になる。

公民館のホールでは、地元のミュージシャンやブラスバンドが演奏し、「障害者」と「健常者」の混成グループによる合唱、会議室では「手話教室」、外の駐車場には模擬店が並んだ。江美たちのサークルのメンバーも、ヴォランティアとして運営に携わっていた。

私は、江美が手伝っている「焼きそば」の模擬店に顔を出した。そこで、「どうもおばさん」と出会った。

テントの前に置かれたテーブルに着き、注文した焼きそば——イカ抜き、キャベツ少なめ、マヨネーズなし——を待っていると、

「どうもどうも、ごめんなさいごめんなさい」

声に振り返った。

視線を脇に背けるようにしながら、私に焼きそばの載った皿を突き出す女性の姿があった。

皿を受け取ると、その女性はすぐに私から去ろうとした。私は皿を見て、すぐさま彼女の背中に声をかけた。

「あの、ちよつと」

女性は、おそろおそろ、といった様子で私を振り向いた。やはり、視線を私に向けようとしなかった。

「箸がないのだが……」

「あ、どうも、ごめんなさいごめんなさいどうも……」

言いながら、テントに割り箸を取りに戻った。

それが、「どうもおばさん」——伊崎菜穂子との出会いだっただ。

それから何度か、江美に誘われるままに、〈むすびの家〉主催の「朗読の会」を聴きに行ったり、「料理教室」に——さすがに作る側ではなかったが——顔を出したり、その活動に少し関わっていた。

その都度、「どうもおばさん」と顔をあわせた。彼女が私の顔をちゃんと覚えていのかどうか、それは推し量ることはできなかった。焼きそばの屋台での初対面のとき同様、彼女はいつも私に向かって——他の人びとに向かつても——「どうもどうも」と「ごめんなさい」を繰り返した。

ヴォランティア・サークルの江美たちが、彼女のことを「どうもおばさん」と呼び始めたらしい。が、親しみを込めて彼女たちが呼ぶと、それは侮蔑的には響かなかった。

「ねえおじいちゃん、〈むすびの家〉に行つて、詳しい話を訊いてくれない？」

江美がご飯で口をもぐつかせながら言った。

「食べるかしゃべるか、どっちかになさい！」

すささず有里子が言う。

「なぜ、私が……」

「だって、わたしは朝イチから講義だし、お母さんは仕事だし。だったら、消去法でおじいちゃんしかいないじゃん」

「いや、私が言うのは……」

「わかつてる。どうして関わり合いになるのか、つてことでしょ？ もちろん関わる必要なんて、全然ないよ。でも、『どうもおばさん』は他人じゃないから。おじいちゃんだって、あの人のことを『他人』だとは思ってないでしょ？」

早口にまくしたて、鋭い視線を私に向ける。いったい、誰に似たのか。

「わかつた、行つてみよう」

ちよつとした義理を果たすだけだ。私は軽く答えた。

義理の重さを知っていたはずなのに。

〈むすびの家〉まで、徒歩では私の脚で三十分近くかかる。およそ十キロ圏内なら、私はどこへでも歩いていく。有里子は、年寄りの一人歩きは危険だ、と私が出歩くのを好まない。が、私にとっては、体が衰えて歩けなくなるこのほうが危険だ。

この家に厄介になつてから、有里子と、出張中の宏樹の強い勧めで、携帯電話という代物を持たされた。年寄りと子どもは同様に扱われる——歳を取ってはじめて実感する事実。

〈むすびの家〉のある街は、戦災を逃れた地域だ。私が若い時分の一時期を過ごした場所でもある。平屋の民家が多く、道幅が狭い。住人は、何世代か前からずっとこの街に根を下ろして生きてきた者が多かった。

〈むすびの家〉は、旧街道から一本裏に入った住宅地にあつた。民家を改築して作られている。引き戸の上に手書きの看板が出ている。丸っこく、達筆ではないが、个性的で面白い文字だ。利用者が書いたものらしい。

ふと、すぐ隣の家の白壁の異変に気づいた。

——むすびの家の改築は許しません！

——むすびの家の精神障害者受け入れ絶対反対！

印刷されたビラが貼られている。よく見ると、向かいの家のブロック塀、角のクリーニング店、あちらこちらに、ちょうど〈むすびの家〉を包囲するかのようには貼られている。

明らかに、漂う空気の質がいつもとは違っていた。

さらに、すぐ脇に一台のセダン——すぐにそれが警察車両だと確信した。

インタホンのボタンを押そうとするのと同時に、内側から引き戸が開けられた。

現れた目つきの鋭い二人の男——一人は五十代後半、もう一人はまだ二十代後半か。彼らは「一般人」に溶け込もうと努力をしているのかも知れない。が、いつも

それは徒労に終わる。今も昔も変わらない。

年嵩の——と言つても私より二十以上若い——男の表情が一変した。

「これは奇遇です。たいへんご無沙汰します。この街に帰つてらっしゃったことは存じ上げていましたが、ご挨拶が遅れました」

いけしゃあしゃあと言つてのけた。何のことはない。私の身上調査はずつと続いている、ということだ。

「ずいぶんと矍鑠としてらっしゃいますな。また何か『お仕事』でもはじめられるんですか？」

「冗談じゃない。私はただの老いぼれだ。越阪部さんこそ、おさかべじきに定年なのじゃないかね？」

越阪部の皺の多い四角い顔が、いつそう皺を増した。

「片づけなきやならないヤマがいろいろ残つてるので、そう易々と退職なんかしてはられませんよ。ところで、あんたがなんでまたここに？」

「任意の事情聴取なら、応じるつもりはない」

「変わらないな。ま、あんたのような人が、精薄殺みたいなチンケなヤマを踏むとは思えないがね」

口調が変わつた。明らかに、刑事の元犯罪者に対するそれだった。

「二つ、訂正しなさい。一つは伊崎さんを『精薄』と呼んだこと。もう一つは『チンケなヤマ』と言つたこと」

私が言うと、越阪部は鼻で笑つた。

「あなたに説教されるほど落ちぶれちゃいない。あんたがこのヤマにどう関わつてるのか、いずれ改めて話、伺いに行きますよ」

越阪部は言い捨て、若い刑事を連れてセダンに乗り込んだ。

ほぼ同時に、入り口の奥から、おずおずと姿を現したのは、一人の若い女性だった。江美よりは少し年長か。〈むすびの家〉利用者の一人だ。何度か会っているの顔は覚えているが、名前はいつまでも頭に入らない。歳を取るとはこういうことだ。名札を見ると「ひがしのまゆ」とある。

「おじいちゃん、刑事さん行っちゃった？」

「ああ、もう帰ってしまったよ」

不意に、東野繭は泣き出しそうな顔になった。

「江美ちゃんは？」

「ごめん。用事があつて来られないんだ」

「怖い刑事さん来て、センせいじめて、あたしたちもいじめて……伊崎さん、もう歌ってくれないのに……。センセもあたしもミツヤ君もアキヨシさんも泣いてるのに、刑事さん、ずっと意地悪して……」

私はそつと東野繭の肩に手を置いた。

「落ち着きなさい。もう大丈夫だ。二度と、あの刑事たちに意地悪はさせないよ。約束する」

靴を脱ぎ、しゃくりあげる東野繭とともに、室内へ上がった。

〈むすびの家〉代表の内田充は、憔悴うちだみつるしきつた表情をしていた。「ひまわりの間」

と呼んでいる十八畳ほどの洋間は、普段なら施設利用者が自由に談笑するためのスペースだった。しかし、今ではソファにたった一人、肩を落とした内田が座り込んでいる。私と東野繭が入ってきたことにも気づいていない様子だった。

「内田さん、このたびは……」

陳腐な台詞が口を付いて出た。が、内田の憔悴を目の当たりにすると、それ以上の言葉を発することができなくなった。

「まさか菜穂子さんが……あんなむごいことに……」

内田は言葉を詰まらせた。その双眸から、涙があふれる。

彼は、還暦を少し過ぎた痩せぎすの男だった。一見、学者風だが、かつては大手家電メーカーの技術者だったらしい。妻が若年性のアルツハイマーに罹ったことをきっかけに、五十になるかならずで退職し、その後は妻の介護にあたっていた。が、その妻が亡くなり——その理由は聞いたことがない——その後、この家を購入し、大幅に改築して〈むすびの家〉を作ったという。

「私も驚いています。しかし、新聞に載っていることしか知らないのです。詳しいことを何か、ご存じですか？」

私の問いに、内田はかぶりを振った。

「病院で……霊安室で……正面から顔を見られませんでした」

「伊崎さんのご家族は？　ここに暮らしておられたのではないでしょう」

「あの人のご実家は隣の県にあるんですが……ご家族とは疎遠なようでした。私が保証人になって、近くの県営住宅に一人で住んでいたんです。例の……児童公園の近くの。朝から夕までほぼ毎日、ずっと〈むすびの家〉に来ていました」

「それでは、夜は県営住宅に帰宅していたんですね。お一人で？」

「ええ、毎晩、八時には。ここから歩いて十五分もあれば、帰れますから。昨日の夜も、八時過ぎにここを出て……」

そこで内田は言葉を詰まらせた。

「伊崎さんのお通夜は？」

「それが……」

内田は口ごもった。

伊崎菜穂子の通夜と葬儀は親族だけで行なう、と伊崎菜穂子の親から内田のもとへ連絡があったという。言外に〈むすびの家〉の内田や利用者の参列を拒む意味が込められているのは明らかだった。

「おかしなことを訊きますが、伊崎さんが誰かに恨まれていた、あるいは嫌われていた、などということは……？」

私が尋ねると、はつとして内田が顔を上げた。

「まるで刑事さんのようなことをおっしゃいますね……。あるはずがないでしょう。もちろん、大勢の利用者がいる施設です。たまには喧嘩だつて起きます。けれど、菜穂子さんがいさかいに関わるようなことはありません。あの人は、特に争いごとが嫌いな方でした。おそらく……想像ですが、子どもの頃、ご家族から優しくされたご経験がなく、つらい思いばかりしていたのではないかと……」

内田は口をつぐんだ。

私は思案した。「どうもどうも」と「ごめんなさい」が口癖になってしまうような子ども時代。私はもつと彼女と会話をしておくべきだったのか、とはじめて思った。

内田は、じつと壁のほうを見つめていた。そこには、施設利用者の描いた絵や版画が貼られていた。

一際、目立つ絵が二枚あった。一枚は、公民館で行なわれた「ふくしまつり」を描かれていると、一目でわかった。きわめて細密に描かれている。

近づいた。よく見ると「点描」というのだろうか、色とりどりの無数の点によって、立ち並ぶ屋台、並ぶ人びとの姿が描かれている。もう一枚には、どこかの公園が描かれている。夜だ。街灯の下に一人の人物。手に持っている黒く細長いものは、笛だろうか。その背後の闇のなかに、うつすらと赤いロケットのような形のジャングルジムが見える。その右手奥のほうには、緑色つぼい小山のようなものが見える。

「伊崎さんの絵ですか？」

「そうです。あの方には、不思議な力がありました。〈サヴァン症候群〉をご存じですか？」

私はかぶりを振った。

内田の説明は、私には少々難しすぎた。知的障害がありながら、ある特定の分野に関して、異常なほど天才的な能力を発揮する人がいるという。百年後の何月何日が何曜日か、たちどころにわかる人。何千冊もの本を丸暗記できる人。とてつもない速度で複雑な暗算ができる人――

「菜穂子さんには、二つの能力がありました。一つは、この絵です。屋外で写生したんじゃないんです。この部屋で、記憶を頼りに描いたんですよ。しかも、このスーラのような点描の技術は、誰にも教わっていないんです」

私には「スーラ」が何者なのか――あるいは何物であるのか――知らなかったが、伊崎菜穂子という人物が持つ能力の一端は理解できた。

「もう一つは、音楽です。一度聴いただけで、ほとんど同じメロディをピアノで弾いたり、口ずさんだりできました。それが、〈サヴァン〉の菜穂子さんの素晴らし

「才能でした」

そう言うと、内田はポケットからティッシュを取り出し、目元を拭いた。

「菜穂子さんだけじゃないんですよ。みんな、誰にでも、何らかの可能性を持つて
いるんです。それを『才能』と呼ぶなら、『障碍』だって、一つの『才能』じゃな
いか、私はそう思うんです」

私は、うちひしがれた様子の内田に、伊崎菜穂子の住んでいた県営住宅の住所を
訊いた。彼は、メモ用紙に県営住宅と、伊崎菜穂子の実家の住所を記した。それを
受け取り、〈むすびの家〉を出た。

今にも降り出しそうな雲行きになっていた。空を見上げていたため、〈むすびの
家〉のすぐ向かいに立っていた男に気づかなかった。

「はた迷惑な話だと思わんか？」

男はでっぷりと太っている。歳は、私とほぼ同じ——正確には、私のほうが五つ
年長だ。男の名は、いずみかじろう泉嘉次郎という。この町の町内会長だ。背は私より低い
が、体重はずつと重い。髪はかなり薄いそれでも顔面は、とても古稀を過ぎたとは思
われぬほど脂でてらてらと光っている。

そして、この男と私とは、腐れ縁としか呼べない長い長いつきあひがあった。

「今度は殺人事件だ。俺のところにも、刑事が来た。俺がどうして障害者のことな
んぞ、知らなきゃいけない？」

「あれは、あんたかね？」

私は塀に貼られたチラシを指さした。

——むすびの家の改築は許しません！

——むすびの家の精神障害者受け入れ絶対反対！

「町の安全を守るのが、町内会長の当然の務めだろう」

「施設の改築と町の安全が、なぜ衝突しなければならぬのか、私には理解できな
い」

私の言葉に、泉は鼻をすすするような仕草をした。六十年も昔から、この男は変わ

つていなかった。

「ほう、面白い。おまえさんの口から『人権派』市民団体の代表みたいな言葉が出てくるとはな。世も末だよ。そう思わんか？」

「私は人権派でもないし、市民団体とも関係ない」

泉のような男が県議に当選した三十余年前、すでに「世も末」になったのだ、とは口に出さなかった。泉の地盤を継いで、長男が県議を三期務めたあと、昨年は参院選に出馬し、比例区で復活当選していた。

「おまえさんが施設に出入りしていることを知らないとも思ったか？ バザーだか何だか知らんが、近所迷惑な催しだ。そのとき、何度かおまえさんの姿を見ているよ。いったい何を企んでる？」

私は泉を無視して歩き出した。この男は、「下衆の勘繰り」という言葉を知らないようだ。背中に泉の声を聞いた。

「俺は、この町を守っている。アタマのおかしな連中にうろろされなないように、体を張って町を守っているんだ。おまえは何を狙っているんだ？」

私は、一人の年寄りに過ぎない。世を捨てた老人に、「何を狙う」との問いは不毛だ。そう自分に言い聞かせる。

はじめて、この公園に来た。私を知っているこの街の姿は、二十年前とはるかに変わっている。

新築の高層マンションと古い木造家屋が混ざり合って立ち並ぶ街。その公園のたずまいは、所在なさそうに、頼りなさそうに見える。意外に、広がった。公園内にはフェンスで囲まれたテスト・コートもある。

警察の規制線は見つからなかった。どこに伊崎菜穂子が倒れていたのか、それを知る手がかりは見つからなかった。

その公園を通り抜け、バス通りを渡った向こうに、県営住宅はあった。高度成長期に建てられたとおぼしき、鉄筋四階建てのアパートが、四棟並んでいる。コンクリートの外壁の、無数の染みとひびが時間の経過を無言で語っている。C号棟の1

2号室が、伊崎菜穂子の部屋だった。

空き部屋が多かった。一階の住人は、14号室の老夫婦だけだった。

「わたしは、あんまり外に出ないんですよ」

ドアを開けた老婦人は、私の質問を怪しむことなく、答えた。

「伊崎さんとおっしゃる12号室の方、まだお若かったんでしょう？ お可愛そうに。うちの亭主は……」

そう言つて、三橋という名の女性は表情を曇らせた。そのときだった。薄暗い屋内から声がした。「おおおおおう」という、狼の遠吠えを思わせる、背筋を寒々とさせる、悲哀に満ちた声だった。

「あら、うちの人つたら……」

彼女は困つたような顔をして、部屋の奥へ「今行きます」と呼びかけた。

「お忙しいところ、申し訳ありません」

私は彼女にお辞儀をし、さらに屋内で横たわつて介助を待っているだろう、彼女の夫に向けて一礼した。

「あの……」

控えめに、三橋の妻は言った。

「何か？」

「今、思い出したんですが……歌を聴いたことがあります」

「歌、ですか？」

「ええ。ここ一週間ばかりでしょうか、外から女性の歌声が聞こえたことがあります。とても綺麗な声でしたよ」

「そうでしたか。ありがとうございます。どうもお邪魔しました」

そのとき、再び室内から「おおおおおう」という、淋しい老人の呼び声が聞こえた。

午後二時に帰宅しても、玄関に迎えに現れる者はいない。有里子は市営図書館の司書として働いている。彼女が作り置いた昼食を電子レンジで温め、独りで食べた。

夕刻近くなり、小雨が降り出した。洗濯物を取り込み、畳んだ。

五時過ぎになって、何かブーンという羽虫の飛ぶような音が聞こえた。虫ではない。私の携帯電話が振動しているのだった。取り上げる。「もしもし」と言うが、返答がない。そのはずだ、「メール」とやらが届いているのだった。

ポケットから老眼鏡を取り出し、読んだ。

—— 駅まで傘持ってきて。お願い♡♡♡

江美からだった。「絵文字」とやらがちかちかとして、たいへんに読みにくい。

しかし、孫の頼みならば、致し方ない。部屋にいても特にすべきことがあるわけではない。

出かけた。

江美は、先に駅に着いていた。

「ありがとう！ おじいちゃん！」

そう言つて、江美はわざわざ私が持ってきた傘には入らず、私の傘と一緒に入つて、私の腕にしがみついた。

今日のできごとを江美に告げると、彼女は不服そうな顔になった。

「なんでもつというろ聞き込みしてくれなかったの？」

「古い先短い年寄りなんだ。少しはいたわってもらいたいね」

「ね、おじいちゃん、行ってみようよ、公園。『どうもおばさん』が亡くなった公園に」

江美は、誰に似たのか、言い出したら人の意見を聞かない。

駅から公園までは、雨の中歩くには少々距離があった。ちょうど、家を挟んで反対の位置にある。そこで、駅前でタクシーを拾った。

公園に着いたときには、やや薄暗くなっていた。私は、江美とともに公園を横断する小径を進んだ。

『『どうもおばさん』』を通過して家に帰ってたんだね」

江美の声が沈んでいる。

同時に、私はべつの気配も感じた。

遅かった。

二つの黒い影。私たちの目の前に立ちふさがった。短く江美が悲鳴を上げた。有無を言わさぬ勢いで、影の一つが突進してくる。動きは読めていた。

傘を突き出した。ひるんだ相手の腕を掴む。そのまま引きつけた。体を沈める。簡単な投げ技。相手は自らの勢いのお陰で、ぬかるんだ地面に仰向けに倒れ込んだ。うめき声。

「放せよ、この野郎！」

江美の叫び声が耳に突き刺さった。一つの人影が江美に掴みかかり、逆に突き飛ばされた。駆け出そうとした。足がもつれる。自分の歳を忘れていた。

背後に気配——振り向きざまに正拳。顔面の真ん中に命中した。相手は声もなくうづくまった。

「その子から離れなさい。用があるのは私だろう」

一步、前へ踏み出した。影は江美に何か光るものを突きつけている——刃の光。刃渡りはさして長くはない——九寸五分の匕首に比べれば。

さらに一步前へ。影が、じりつと後ずさる。一気に踏み込んだ。左腕を伸ばす。相手の得物を払った。光る刃が宙を飛んだ。右手で影の左の小指と薬指を掴む。ひねり上げる。影はうめいた。そのまま地面にうづくまった。指をひねる力は緩めなかった。

「話を聞こう。私に何の用だね？ 誰の使いっ走りだ？」

さらに指をひねる。影は苦しげな息を吐いた。

「ち、近づくな……」

「ほう、何に？」

「てめえがいちばん知ってるはずだ。シンシヨーの家に近づくな」

「近づくと、どうなる？」

力をさらに込める。影はまだ二十代前半の若い男のようだ。

「てめえの……可愛い孫娘が……どうなってもいいんだな」

「ご心配痛み入る。しかし、おまえさんは、自分の指のほうを心配したほうがいいようだ」

一気に力を入れた。こもった鈍い音——男が裏返った叫びを上げた。確実に、二本の指が折れたはずだ。

「くそつ、覚えてやがれ」

陳腐な捨て台詞。時代を超えても変わらぬようだ。三つの人影は、ふらふらと暗がりの中へ消えていった。

「おじいちゃん！」

青ざめた江美が駆け寄ってきた。私の胸にしがみついた。

「怪我はないかね？」

「うん……でも……でも、おじいちゃんは、怪我してない？」

江美は、さきほど勇ましく男を突き飛ばしたくせに、今では半分泣きそうな声だった。

「しているように見えるかね？」

「全然……。ねえ、おじいちゃん、あいつら誰？ 知ってる人？」

「いや、まったく。しかし、見当は付く」

「びっくりした……」

「私もだよ」

「ううん、そうじゃなくて……」

江美は私から体を離し、ためらいながら言った。

「おじいちゃん、めっちゃ強いじゃん……なんで？」

「強くはない。若い頃、少しかだけ合気道をかじったことがあるだけだ。さあ、帰ろうか」

いつの間にか雨はやみ、蟋蟀が鳴き始めている。傘を拾い上げた。

江美の表情が一変した。眼をつり上げ、私をにらみつけている。

「どうして？ これから、行くんだよ！」

私は孫の顔をじつと見返した。

ほんとうに、誰に似たのか。

「強いのは、江美のほうだな」

私は言った。江美が、ぺろっと舌を出して微笑を見せた。そのときだった。昼には気づかなかったものが視界に入った。

赤いジャングルジム。街灯に照らされ、ぼんやりとその姿を暗闇に浮かび上がらせている。

私は無言でそちらに向かって歩き出した。

「おじいちゃん？」

ジャングルジムの前まで来ると、周りを見回した。案の定、十メートルほど離れたところに、恐竜の姿をかたどった滑り台らしきもの——緑色の小山——があつた。

私は江美をうながし、小道を進んだ。

いささか覚束なくなっている記憶力を頼りに、数分後に「その場所」らしきところに行き着いた。

「どうしたの、おじいちゃん？」

「伊崎さんは、ここからの風景を絵に描いている。つまり彼女は、まさにちょうどこの場所に立つたことがあるんだ」

「あ、そういえば、〈むすびの家〉で絵、見たことあるよ。そっか、あの絵って『どうもおばさん』が家に帰る途中の風景だったんだ」

驚異的な記憶力に基づいて描かれた絵であるならば——

「あれっ、ノリやんじゃん！」

唐突に、江美が声を上げた。

少し離れた街灯の下に、一人の若い男がいた。片手には黒く細長いケースのようなものを持つている。

男は、私たちの存在に気づいていなかったらしく、びくつと体を震わせた。

「江美ちゃん？」

男はゆつくりと歩み寄ってきた。

ちょうど江美と同じくらい歳の頃、痩せていて、骨張った顔立ち。黒縁の眼鏡を

かけている。

「あのね、彼はノリやんこと、美山良則君。みやまよし高校時代に同じクラスで、今は芸大に行ってるの。音楽やってるんだ。ノリやん、こっちはわたしのおじいちゃん」

「どうも、孫がお世話になってます」

私がお辞儀をすると、ノリやん——美山良則は、しゃちほこ張ってお辞儀を返した。

「ノリやん、ここで何やってるの？」

江美の問いに美山良則が答えるより前、私が言った。

「美山君、ここで音楽の練習をしているのかな」

「は、はい、そうですね……」

美山は怪訝そうに答えた。さらに怪訝そうな表情の江美。

「なんでおじいちゃん知ってるの？」

『『どうもおばさん』の絵に、楽器を持った人物が描いてあったんだよ。美山君が持っているのは、おそらく楽器のケースだろう。ここなら民家から少し離れているし、夜でも近所迷惑にならずに音楽の練習ができるだろう」

「そ、そうですね。家じゃうるさいと言われるし、大学の練習室は九時に閉め出されるし、ちやうどここなら、文句を言われずに練習できるので……」

「ねえ、ノリやん。『どうもおばさん』知らない？ あ、四十くらいのおばさんなんだけど、この辺りをよく通ってたはずなんだ」

江美の質問に、美山はすぐに答えた。

「ふーん、あの人かなあ。ちよつと……つまり、アレ、その、何ていうか『障害』がある女の人？」

江美は大きくうなずいた。

「何度か、ここで会ってるよ。ときどき立ち止まって俺の練習も聴いたりして……ライブでもないのに人に聴かれるの、恥ずかしいんだけどさ」

「何言ってるの、もうすぐ〈レスト〉のライブなんでしょ。チケット五枚も買わせたくせに」

江美が親しげに言う。

「完成してない曲は……人に聴かせたくないんだよ」

そう言いながら、美山はケースを開いた。取り出されたのは、三分割された、細長くて黒い笛のような楽器だった。絵に描かれたとおりだ。

美山は楽器を手早く組み立てた。そして、口をあてると一音を吹いた。透き通った音だった。

「それは、クラリネットなのかな？」

私が尋ねると、美山は笑った。

「たいていの人が、クラリネットとかオーボエと間違えちゃいますけど、『イングリッシュ・ホルン』です。で、『ホルン』と聞いてびつくりするんですよ」

そして、美山を一度眼を閉じ、静かに楽器——イングリッシュ・ホルンを奏で始めた。それは聞き覚えがあり、どこか懐かしく、切なく、湿った夜の空気をまっすぐに貫いて、夜の公園に響いた。

演奏を終えると、江美が拍手をし、

「さっすがノリやん！」

とはやし立てた。確かに、うつくしい曲だった。

「ドヴォルザークの交響曲第九番『新世界より』第二楽章です。『遠き山に日は落ちて』なんて日本語の歌にもなってる有名な曲です」

「私は『家路』という題名で知っていた」

「そうですね。宮澤賢治も詩を付けたことがあるそうです。そういえば、今日は、その『どうもおばさん』は来ないみたいだなあ」

江美がはつと息を呑むのがわかった。

代わりに、私が半歩前に踏み込んだ。

「伊崎さん——というのが本名なのだが——今日は、来ない。もう来ることはない」

「は？ どうしてですか？」

「亡くなったんだよ。昨夜……この公園で」

私は、新聞記事に載っていたこと、〈むすびの家〉の内田から聞いたことを、美

山に告げた。

美山は絶句した。みるみるうちに、その端正な顔から血の気が引いていく。

「そんな……どうして……」

「ノリやん……」

江美が歩み寄ったが、美山は雨に濡れた地面に、がくり、と膝をついた。

小雨がふたたび降り出していた。私は悲しみに暮れる若い二人に、そつと傘を差しかけた。

「君は、よくここで練習するのかね？」

「一週間に……二、三回くらいです」

涙をすすりながら、美山は答えた。

「昨夜は？」

「昨日は、バイトでした。漫画喫茶で、夜の八時から、午前一時までです」

「君以外に、ここで一緒に練習している人はいるのかな？ つまり、ここで一緒に

『どうもおばさん』——伊崎さんに会ったことのある人は？」

美山は、思案する表情になった。

「ギターのヤマイなら、何度か。それから、ピアノでヴォーカルのカナエちゃんも、一度か二度、ここで練習したことがあります。けど、その人に会ってたかどうかは……。パークションのコロクは、さすがに公園じゃ演奏できないので、ここに来たことはないはずです……。あ、すみません。ヤマイっていうのは——」

「大丈夫、わたし、〈レスト〉のメンバーのこと知ってるから。あとでおじいちゃんにみんなのこと教えるね」

江美が答えた。

「美山君、君自身が、ここで誰か怪しい人を見かけたことは？ 例えば、伊崎さんの跡を尾けていたような人に気づいたことは？」

美山は首を振った。

「まさか、そんな人いませんよ。こっちは練習に没頭してたし……それに、あんなにいい感じの人が、どうして事件に巻き込まれなきゃいけないんですか？ そんな

の間違つてませんか？」

私は黙っていた。若者がぶつけてきた問いかけは、私にとって、あまりにまつすぎ過ぎた。

数々の過ちを犯し続けながらも、今まで生き長らえてきた私に、答える資格などなかった。

やや青ざめた様子で、玄関から有里子が戻ってきた。

「お義父さん、警察の方が……」

卵焼きを口に入れかけた江美の手が止まった。私は黙つてうなずき、玄関に向かった。

越阪部は居丈高に腕組みをしていた。背後には、昨日見かけた若い刑事が隠れるように立っている。

「あなたたちは、いつまでも礼儀を学ばないようですね。朝の七時半なら、まだ嫁も孫も自宅にいたことがわかつているはずでしょう」

私が何を言おうと、越阪部の表情は変わらなかった。むしろ、歳を取ることで、厚顔さは昔よりも増しているかもしれない。

「ほう、じゃあ、嫁さんや可愛いお孫さんに知られたくないことでもあるのかね」

「嫌味は結構。本題に入ってください」

「あなたの狙いは何だ？」

越阪部の眼の奥が鈍い光をたたえている。性格のねじ曲がつた男だが、刑事として有能であることに違いはなかった。

「わかるように説明してくれませんか」

「ほう、この期に及んでとぼけるつもりかい。まずは〈むすびの家〉に顔を出し、次には伊崎菜穂子が住んでいた県営住宅だ。そのあと夜になって、今度は孫を連れて現場の公園。あんたみたいな人間が、なぜ今回のヤマに首を突っ込む？」

立場が違えば、友人になつていたかもしれない男を、私はじつと見返した。もはや、その機会など永久に訪れないのだろうか。

「ずいぶんとお詳しいですな。まるで見ていたようだ」

「当たり前だよ」

「なら、孫娘が暴漢に襲われかけたとき、なぜ助けくれなかったんです？ 市民の味方である警察が」

「笑わせてくれる。あなたの口から『市民』なんて言葉が出るとはね。むしろ、あなたを傷害容疑で引っ張ったつていいんだ」

「ほう、被害届でも出ましたか」

越阪部は大袈裟にため息をついた。そして芝居がかった仕草で、人差し指を私の鼻先に突きつけた。

「いいかい、精薄のガイシヤがあなたの知り合いだったかイロだったか知らないが、今度のヤマには、あなたの出る幕はない。あなたたちの時代は終わったんだ。もう二十一世紀なんだよ。下手に老いぼれが触ると、火傷じゃ済まないことになる」

「これは驚いたな。警官が脅しにかかるとは」

「警告だ。あんただつて、昔はそつちの方面じゃ名の通った御仁だ。軽拳妄動は謹んでもらいたい」

私はカマをかけた。

「〔石原組〕がらみですか」

越阪部の両方の眉ががり上がった。が、私の問いには答えなかった。それだけで返答は充分だった。

「年寄りには年寄りらしく、ゲートボールでもやってるんだな。ただし、あの公園以外で」

越阪部は若い刑事に眼顔で合図すると、出て行こうとした。が、一度立ち止まり、私に背中を向けたまま言った。

「〔石原組〕なんて看板はもう下ろしているよ。三代目のボンボンは、〔アイ・インヴェストメント〕と名乗ってる」

越阪部は言い捨てた。私はドアを閉めた。

ダイニング・キッチンに戻ると、不安げな面持ちの江美が立っていた。

「おじいちゃん、警察の人、『どうもおおばさん』のこと、何か教えてくれた？」
誤解をしている孫に、あえて真実を話す必要はない。

「捜査は始まったばかりだよ。どんな些細な手がかりでも見つけようと、朝早くから懸命に歩き回る。それが警察の仕事だ」

「でもお義父さん……」

有里子が何か言いたげに口を開いた。私は静かにかぶりを振った。

「さあ、朝飯にしよう。それから、有里子さん、今日からしばらく、江美を駅まで送って行ってくれないかね」

「おじいちゃん？」

怪訝そうに江美が口を挟みかけたが、有里子は少しだけ笑って答えた。

「わかりました。けれど——」

有里子が言い淀んだ。

「けれど、何だね？」

「気を付けて下さいね」

私は微笑して答えた。

「自分の歳はわきまえているつもりだよ」

私はまた、家族に一つ嘘をついた。